

ヤン・ホンダ選集，第六巻

原 實

1992年7月28日忽焉として世を去ったオランダの碩学 Jan Gonda の論文集 (Selected Studies) の第6巻が2冊となって E.J. Brill より出版された。既にその1-5巻は1975年、彼の70歳の誕生日に Utrecht 大学、インド学研究室の門弟の献呈する所であったが、その後15年、86歳でその生涯を閉じるまで彼は尚精力的に著述活動を続行した。ここに収められる論文は従って彼の晩年1971-1989年の間に発表されたもので、各冊36篇の論文を収め、総数72点を数えるが、尚未だ印刷中のもの5点を残している。

これより先1972年、彼の Utrecht 大学教授就任40年を記念して友人門弟相集い祝賀論集 India Maior が上梓され、そこにそれまでの彼の全著述目録が G. Chemparathy の手によって編纂、掲載されているが、今回その目録は D. Heiligers によって継続完成された。それによると彼が著書70冊を始めとして論文、書評、解説の形で残したものは実に総数720点に及んでいる。

ここに紹介せんとする二冊の論文集も、ともに500頁を越す大冊で、72篇の論文はすべて発表年次を追って配列されているが、その対象とする所は Veda 文献より Hinduism, 更に Indonesia 研究に及び、又方法論も言語学、文献学、宗教学と多岐に亘っている。唯、余りの博学の故に叙述が時に冗長となり、問題の焦点が時に不明瞭となる嫌いがあるが、膨大な資料の提示は後学を資する所極めて大なるものがある。Index (Words, Subjects, Passages quoted) がこれに付加されていればその利用度は更に高くなったと思われ、又誤植も決して少なくない (これは特にインドで出版されたものに顕著である) が、これは今後に残された課題であろう。

今、これら72篇の論文の全てを逐一解説する事は紙数の許さぬ所であるので、以下に論文を主題別に分類し、問題点に絞って概観し、その後之主として語彙研究 (Wort-kunde) を中心に個々の論文の一端を紹介したいと考える。

総じてこれら全72の論文は大別して以下の六つの範疇に分類されうる。

I. Mitra 神の研究。

1. The Vedic Mitra and the epic Dharma
10. Mitra and Mitra. The idea of “friendship” in ancient India.
19. Mitra in India
28. Postscript on Mitra.

II. Prajāpati 神格の研究。

39. Notes on Prajāpati.
43. The popular Prajāpati.
47. Prajāpati and prāyaścitta.
51. The creator and the spirit (Manas and Prajāpati)
57. Some notes on Prajāpatir aniruktaḥ
62. The pronoun ka and the proper name Ka.
64. Prajāpati's numbers.

この他表題にこそ現れないが内容的に見て連関のもるものとして

48. Vedic gods and the sacrifice.
53. Notes on the ritual use of ṚV. 10. 121. 10.
69. The Highest Principle in the Early Veda—Some Critical Notes.

がある。

III. Ṛgveda, Atharvaveda の特定 mantra の研究。

7. Some notes on the use of Vedic mantras in the ritual texts of the Vaikhānasas.
24. Religious thought and practice in Vaikhānasa Viṣṇuism.
25. The mantras of Kauśika-Sūtra 10-52
30. A propos of the mantras in the pravargya section of the Ṛgvedic Brāhmaṇas.
32. Ṛgveda-Saṃhitā, 5. 78.
33. The use of the Viṣṇusūkta in some ritual texts of the Vaikhānasas.
36. The Śatarudriya
41. The mantras of Taittirīya-Brāhmaṇa 1. 5. 5.
53. Notes on the ritual use of ṚV. 10. 121. 10.
54. The gods of the godāna ceremony (AVŚ. 6. 68)
56. Ṛgveda-Saṃhitā 8. 18.
58. Ṛgveda 1. 36. 13 and 14.

63. A propos of Śatapatha-Brāhmaṇa 2. 4. 1.
68. The Mantras of the Prāyaṇīya Section (Introductory Sacrifice) as Prescribed in the Ṛgvedic Brāhmaṇas.
- IV. 特定概念の研究。
4. The significance of the right hand and the right side in Vedic ritual.
9. Duality in Indian thought.
13. Background and variants of the Hiraṇyagarbha conception.
14. The double name of the Kuru-Pañcāla
17. Triads in Vedic ritual.
20. The verbal contests in the Ṛgveda
21. The association of divinities in pairs.
26. Vedic cosmogony and Viṣṇuite bhakti
44. "In the beginning."
46. All, universe and totality in the Śatapatha-Brāhmaṇa.
50. Die Bedeutung des Zentrums im Veda.
52. The redundant and the deficient in Vedic ritual.
60. Mind and moon.
- V. 特定語彙の研究。
5. Mudrā
11. An interesting use of Skt. Loka.
15. Nimitta
18. The Vedic gods Aṃśa and Bhaga.
23. Vedic vidātha
34. Upanayana.
35. Śuci.
55. Varcas
59. Parameṣṭhin
61. Nidhipati (AVS. 7. 17. 4etc.)
65. Note on āyuh
66. Notes on pūriṣa.
70. The meaning of Vedic Iṣ.
72. Vāja in the Ṛgveda.
- VI. その他 (インドネシア関係, G. Dumézil 批判, 通俗講演)。
2. Balinese hymns addressed to god Akasa.
3. The influence of Indian languages.

- 6. Some notes on the worship of Viṣṇu in Indonesia.
- 12. Pāṇini and modern linguistics.
- 16. Dumézil's Tripartite Ideology : Some Critical Observations. (1, 18 and 71).
- 37. General President's Address (4 versions on Manu's flood-legend).
- 40. Śrī in Balinese hymns
- 71. Veda.

この中、(I)と(II)に関しては別に The Vedic god Mitra (1972), Prajāpati and the Year (1984), Prajāpati's rise to higher rank (1986), Prajāpati's relation with Brahman, Bṛhaspati and Brahmā (1989)等の単行本としても公刊されているから、著者が晩年この二神格（これは更にインドの友情、造物主一般の問題に関連する）に特別の関心を払っていた事を物語っている。(III)に収められている論文は更に Veda 祭祀文献 (Brāhmaṇa, Śrauta-sūtra) に引用されるものと、後期 Hinduism, 就中 Viṣṇu 教の典籍 (Vaikhānasa その他) に援用されるものとに分けられる。前者において著者は Veda の讃歌が元来文学的なものでも哲学的なものでもなく、全て祭式の文脈において理解すべき事を説いているが、それは本邦の辻直四郎博士年来の持論と軌を一にしている。後者は後期 Hindu 教徒が彼等の宗派の正統性を権威づける為に如何に Veda の mantra を利用したかを如実に語るものとして、インド宗教史の連続性と革新性の問題に関っている。(IV)の中で「数」は以前から彼の関心を惹いていた所であるが、近年にも The dual deities in the religion of the Veda (1974), Triad in the Veda (1976) の単行本が出版されている。又その中で「右」(dakṣiṇa = Lat. dexter) の問題(力, 男性, 器用, 優越, 清浄, 明白との関連, 但しそれは南の方位=不吉にも関連する)は文化人類学者の関心を惹く所であろう。最後の(VI)はこの碩学がインド文化を世界史の中に如何に位置付けていたかを読者に垣間見させる如くであるが、同時に安易な学への approach への警告もここに窺い知る事が出来る。

(V)語彙研究には manas に関する二篇 (51) manas and Prajāpati, (60) Mind and Moon がある。前者に於いて思考器官としての manas の機能とその本質, ギリシャ語の ménos との意味上の類似, Skt. vāc との連関(思考と言語)の問題が論じられ, Prajāpati の創造意欲に著者は manas と kāma との接点を見出している。後者は有名な RV. 10.90.13 その他に言及される「人死して眼は太陽に, 呼吸は風に帰る」と詠われて小

宇宙（個我）と大宇宙の対応が語られる中で「意は月に帰る」とされるが、それが何に基づいているかを考察している。月の定期的な満ちかけと manas の可動性を連関せしめ、それを立証するために豊富な文献の証拠を挙げている。この他、類似の思考作用 sarjñāna, medhā の両語は (38) Translating the Veda (with regard to Ai Ar. 2.6.1) に論じられている。

この他 madhya, madhyama の語義は (50) Der Bedeutung des Zentrums im Veda に扱われ（中心＝力の源泉）、そこで yoni（胎）、nābhi（臍）、hṛdaya（心臓）との連関、更には中華思想（madhya-deśa）、madhya = dhruva の問題も検討される。類似なものとしては idaṃ sarvam（material, or phenomenal world）と sarvam（totality）の研究があり、sarva と viśva の差異が明示されている（46 All, universe and totality in the Śatapatha-Brahmaṇa）。これと対蹠的なものとして (52) The redundant and the deficient in Vedic ritual がある。祭式における過不足（nyūna, atirikta）、正規（samprati）よりの逸脱、不調和は不完全性の故に禍を齎すものとして恐れられた。但し善義の atirikta はもとよりこの限りでない。他に数詞99（不足）、101（過）、男（過）女（不足）の問題もここに論じられる。

(57) Prajāpati anirukta は絶対者の把握理解の問題に関している。古くから絶対者はその1/4によって現象界に姿を顕し、残りの3/4は深窓に隠蔽されているといわれるが、この論文は anirukta = aparimita となして心行処滅、言忘慮絶、言語道断の相を造物主にことよせて説いている。(62) The pronoun ka and the proper name Ka はこの疑問代名詞が RV. において何回、又どのような文脈において用いられているかを周到に検討する。質疑応答を初めとして、感嘆賛辞、謎の提示にその文脈が分類される中で、謎の提示が物事の本質探求に通じ、それが固有名詞化して Prajāpati（unspecified individuality = anirukta）となる過程を明らかにしている。(64) Prajāpati's numbers は Prajāpati に関連する数詞の考察で、ここでは21(7x3)、7、101(100+1)、16(4x4)、17(16+1)、33、34(33+1、17x2)、1000 の数が取り上げられて、その象徴的意味が考察されている。この他数詞2については(8) Duality in Indian Thought があり、そこではそもそも善悪、苦楽、恩讐等所謂二元対立に如何なるものがあるか、その淵源歴史は如何、更にそれらの超克（dvandvātīta, nirdvandva）に絶対的境地を見出さんとするインドの思考の特質が如何なるものであるかを論じている。具体的には sat : asat, para : apara, nirguṇa : saguṇa 等の概念がここに考察の対象となっている。更に、3については(15) Triads in Vedic Ritual があり、それは相対する二元の上に一を加えて三

となし、それに全体性 (totality) 完結性 (completleness) を賦与してこの数を聖数 (holy number) となす思惟方法を論じている。

この他 *aṃśa* と *bhaga* に関して (16) *The vedic gods aṃśa and bhaga* がある。この Veda の脇役的二神格は共に「部分、分け前」を意味するが、前者が全体に追加、加算され、それを完成させるための「部分」であるのに対し、後者は分配されるために全体からはぎ取られる「部分」を意味している。かくて前者に静的、後者に動的意味合いが賦与される事となるが、両者の間には補完性のある事も又事実である。

*Loka* に関しては別に一著を上梓している (*Loka, World and Heaven in the Veda*, Amsterdam 1966) が、有名な *Indra* の泡による *Vṛtra* 退治を語る TB.1.7.1.7 (*na vā etad divā na naktam. tasyaitasmiṃ loke*) に見える *loka* (屢々 *loka* = *kāla*, *saṃdhi-kāla* と解釈されている) に *Tages-licht* (open place to which the light of day had access) の解釈を寄せている (10)。更に通常 *vital power*, *vigour* (生命力) と訳される *āyus* には時間的意味を賦与して、*complete term of life*, *complete span of life*, *full length of existence*, *duration filled with existence* の訳を提唱しているが、この解釈は邦語の天寿、寿命の義に近い。最後の論文 (72) *Vāja in the RV.* は *vāja* の語が邦語の「覇気」を実体化した概念である事を明示し、具体的にはこれによって更新力、回復力 (*demiurgic restorative exploits*) が賦与されるとする。

最後にインドネシア関係のもの一篇を紹介する。(2) *Balinese hymns addressed to god Akasa : Śiva* の 8 相 (*aṣṭa-mūrti*) の 1 とされる *ākāśa* (虚空、精気) は古ジャワ語宗教文献にあって神格化された。これは「空」(*śūnya*) とも「無垢」ともいわれ、又 *Agni*, *Vāyu*, *Āditya*, *Yama* 等の 8 神格の顕現ともいわれ、*śiva-nirvāṇa* とも同一視された。虚空崇拜は *Matsya-purāṇa* 253.24 にも見えるが、この信仰は恐らく Cola 王朝時代に南インド (*Chidambaram*) より伝えられたものと思われる。

以上、今世紀最大の Indologist として国の内外にその令名をほいままにしたオランダの碩学の晩年最後の諸論稿を概観したが、その研究の歩みが最後まで衰えなかった事に我々は驚異と尊敬の念を新たにす。唯、その完成を待ち望みながら刊行を直前にして他界した事は返す返す悔やまれるところで、筆者もその門弟と悲嘆を共にするものである。尚、彼の業績を概観した追悼文 (Obituary) に H.W. Bodewitz のそれ (*Indo-iranian Journal* 34, 1991, pp.281-286) があり、筆者も他に邦語で纏める機会があった (*印度学仏教学研究* 40, 1992, pp.835-840)。

J. Gonda, Selected Studies, Presented to the author by the department of Indology, Utrecht University, volume VI, Part 1 and 2, Including a bibliography of the author 1970-1991 compiled by Dory Heilijgers, E.J. Brill, Leiden, New York, København, Köln 1991, volume 1 xxiv-542, volume 2 x-581.

カルトネン著

## 初期ギリシャ文献中のインド

原 實

ヘロドトスが人間の住む最東の地、その先は砂漠（タール砂漠？）となると称したインドは、古来不思議な民族、動物の住む所、お伽話の国、そして又時に理想国として西洋古典世界の夢を誘った。但し、彼等の頭に描いていたインドは、時にエチオピアとも混同されて、その記述の対応部分を現存インド文献に求める事は必ずしも容易でない。その主たる理由はギリシャ人の知っていたインドが現在のパキスタン、アフガニスタンの東部に限られていた事、そしてこの地方は往時古典インド文化の辺境に位していたため、正統派の伝えたインド側の古い文献に正確に伝えられていない事実、又は彼等の情報がこの地方より屢べルシャ人を通して間接的に伝えられた事情に起因している。加えて所謂 *Interpretatio Graeca* の視点はこの問題を更に複雑にした。

16世紀以降、この西洋古典世界とインドとの関係は泰西知識人の関心を喚び、18-19世紀にインド古典学が確立した後も西洋のインド学者の或る者はその西洋古典学の素養、学殖より折りに触れてこの問題に言及した。著名な学者として、A.H.L. Heeren, Ch. Lassen, P. von Bohlen, H.H. Wilson E.A. Schwanbeck, A. Weber, J.W. McCrindle の名を挙げ得る。しかしながら、東西に跨るこの分野の研究は、その対象が多様な学問的領域（考古学、言語学、民族学その他）に亘り、且つは多種の言語の習得を前提とする故に、学問的厳密を期する時決して容易でない。屢々それは、*wild speculation, unfounded assumptions* とその踏襲に終始している。ヘルシンキ大学、A. Parpola 門下の著者 K. Karttunen はこの種の非学問的